

『ハンナ』2016年3月号 p. 43
第13回ヘンデル・フェスティバル・ジャパン
オラトリオ《イエフタ》全曲公演

ヘンデル・フェスティバル・ジャパン オラトリオ『イエフタ』

2016年1月11日 浜離宮朝日ホール



撮影：青柳聡

ヘンデル最後の舞台作品 ノーカット上演

第13回となるヘンデル・フェスティバル・ジャパン(HFJ)公演は、作曲家が失明の危機に瀕しながらも鋼鉄の意思で書き上げた最後のオラトリオ『イエフタ』全曲。古楽専門のキャノンズ・コンサート室内合奏団と同合唱団の演奏。指揮はHFJ実行委員長の三澤寿喜。三澤の音楽運びはテンポ、休符の扱い、決め音など随所にアイデアの満ちたもので、根っからの劇場人ヘンデルも定めし、こうした仕掛け満載の演奏に手腕を発揮していたであろうと胸がとさめいた。合唱のドラマティックな表現力も比類がない。

ソリストは、イエフタに辻裕久(T)、その娘イフィスに広瀬奈緒(S)、妻ストルジェに波多野陸美(Ms)、イフィスの恋人ヘイマーに山下牧子(A)、イエフタの弟ゼブルに春日保人(Bs)、天使に富山みずえ(S)。富山は当初イフィスを歌うはずだったが体調に鑑み、天使に回ったそうだが、その清新でみずみずしい歌声はこの役にふさわしく、出番は少なくとも存在感があった。イフィスの広瀬も声良し、感情表現にも優れて敵役。辻裕久は張りのある声でイエフタの感情のひだを歌い上げ、波多野陸美は娘可愛さゆえの母親のエゴイズム、やりきれない思い、夫への憤懣をよく表現した。山下は愛情深く潔いヘイマーの青年像を、春日はゼブルの穏健な人物像を描き出した。

英語上演ながらすべ
てが聴き取れるわけ
もなく、また理解が追
い付かないのはやむな
しであるが、ヘンデル
の総決算とも言うべき
円熟の音楽を存分に味
わえた。

(萩谷由喜子)